

南支

湘桂撤退作戦殿軍のしんがり

新潟県 大鳥寅次

昭和十七年九月、新潟村松の部隊に召集、十一月には千葉佐倉の東部第六四部隊へ転属、十二月下旬、節第九四〇一部隊へ転属のため門司出帆。

一月一日、広東省黄埔上陸、以来南支各地の戦闘・警備。昭和十九年六月、湘桂作戦発起とともに第一線の駐地を進発、それから広西省各地を転戦すること約一か年間。中・南支軍は桂林・柳州占領後貴州まで突入、また二個師団は仏領印度支那（ベトナム）まで、文字通り大陸を縦貫して作戦の目的達成したわけだ。

す。

—この作戦の目的とか、自分たちの部隊の行動を、その間知っていましたか。

いや、ただただ夢中で行軍し、戦闘をしていただけです。明日の命も、行動も何もわからず、というところが実感で、作戦目的や、経過を知ったのは復員後三十年ぐらい後です。部隊史編集に参加したり、慰霊祭などで、先輩や戦友から聞いて段々と判ったわけでした。

—軍隊勤務約四年ですが、その中で最も心に残るところか、忘れられない戦闘体験について話をして下さい。

四年間、召集から復員まで、教育・内務・警備・戦闘いろいろありますが、やはりそれは湘桂進攻作戦よ

り撤退の殿軍となり、第三師団の撤退を援護した二十年四月頃から終戦までの戦闘です。

その中でも、米式装備の何十倍という中国軍と死闘した柳州南方の百朋街・大鳥山で、私の中隊、特に第一小隊の戦友が戦死したことです。

六月二十二日の午後、平井少尉を長として大鳥山に陣地を敷いた。私達は分隊長新村伍長を長とし一個分隊で、山の最前線に壕を掘って敵と対峙することとなりました。しかし、山肌は岩と砂を混ぜたようなもので、蛸壺さえ掘れないのです。夜中までかかってどうにか壕ができたのです。敵は遠方に出没して大鳥山に対しては何ら攻撃をしかけて来ませんでした。

六月二十三日朝、前方の部隊が移動してくる。「どうも敵らしい。」と見たので後方陣地の塩野分隊長と一緒に確認した。

いよいよ敵が来る。私達は緊張して配備についた。

結局、この戦闘があの大激戦の幕開けとなったのです。敵の圧倒的な猛射撃が始まった。これは今までの中国

軍との戦闘で経験したことの無い激しいものでした。

その時、大鳥山には、重機関銃隊を含めても二、三十名しか守備してはいなかったでしょう。敵の数は無数といってもいいくらい多い。しかし、私達はどんなことがあっても守り通さなければならぬ。「死守せよ」の命令だし、我が分隊が日本軍の最後尾の最先端、その数は六、七名でした。

砲の射撃はますます激しい。我々は何も判らなくて、その攻撃に耐えなければならなかった。頭を持ち上げられぬほど弾丸が飛んでくる。射撃がなくなつたと思つたら手榴弾の雨です。それを投げ返しながら夢中で応戦する。やっと敵を撃退するとまた猛射撃の嵐です。そんな戦闘がしばらく続いたような気がする。我々の守備はもう先程から限界に来ていた。

新村勇分隊長という人は、私より一年先輩だが中隊トップの成績で、責任觀念の強い人だった。後輩に対しても思いやりがあり、我々仲間も尊敬していた。分隊長は、分隊長の長として「陣地を死守しなければならぬ。このままでは全滅だ。」と思つていたと思いま

した。

だが、中隊からの援軍は来ない。猛攻を受けている我々分隊から連絡など行ける時間も人もいない。ただ、攻撃に耐えて、敵を撃退しなければならぬ。さらにはますます猛攻を受ける。後方に洞窟があるので、分隊長は我々に一時退避を命じていた。だが頭さえ持ち上げることができないが、ようやく陣地を移しつつあったのです。

その時、前方で「天皇陛下万歳」の声がした。しかし、その姿を確認することができなかったのです。私達の応射と手榴弾戦の中にあつたからでした。しかし、私達分隊はようやく陣地を移すことに成功した。これは岩穴のような所で、敵も我々の位置を確認することが出来なかつたようです。だが、大鳥山の中腹まで敵が進出していたので、我々の洞窟は敵の真中であつたわけです。

敵は、我々の射撃で我々の位置を発見したらしく、草に火をつけ燻り出し戦法です。幸い我が分隊は被害を受けず頑張り通すことができました。しかし、新村

分隊長の姿がその中にないのです。気になりながらも、洞窟の周囲が敵だらけ、出ることもできなかったのです。

随分永い時間が経つたような気がしたが、実際には二十分ぐらいだったかも知れないけれど、我々にとつては四十分にも感じていました。

すると、上の方で大声が聞こえる。日本軍らしい、聞き覚えのある声だ、それは落合軍曹や根橋伍長など先輩達だった。我々は入口の岩を取り除いたら、

「大鳥早く出て来い」

やっと懐かしい顔、心強い顔、もう大丈夫だ。

応援に来てくれた隊が、突撃をして敵を撃退してくれたのです。四囲には敵の死体や、不発手榴弾や、兵器なども散乱していました。私はすぐ前の陣地に走りました。そこに新村分隊長が倒れていた。「新村班長」と言つて抱き起こしたけれど、既に名譽の戦死を上げておりました。先程の「天皇陛下万歳」は班長の最後の声だったわけです。

※よく「天皇陛下万歳」と唱えた人はいない「お母

さん」だった。というけれども、新村班長をはじめ、何人かの人の「万歳」は現実には聞いていたし、実際に唱えた人が九死に一生を得て生還した実例は、我が部隊ではありません。

班長は、自分の責任を果たすため(当時「死守せよ」という命令を受ければ、死んでも守らなければならず、実際には玉砕、全滅しても降伏しなかった例は沢山ある)私達部下を安全な洞窟に移して、敵中で散ってしまったのです。私は今でも新村分隊長の姿や顔が思い出されますし、四、五十年経った今でも(慰霊祭や戦友会で)先輩・後輩の区別無く分隊長の悪口を聞いたことが無いのです。

これからが、大鳥山の死闘といわれる大激戦となるわけです。翌日の戦場で私と同じ分隊で優秀な人だった早川雅夫兵長が戦死してしまいました。彼と私は広東で第三中隊に編入の時から同じ山本隊、同じ擲弾筒分隊でした。真面目一方で学課もよくできた人でしたし、とくに擲弾筒射撃は中隊一の名手でした。

お母さんと妹さんを埼玉の羽生にのこしていたのが

気の毒でなりません。

(戦後妹さんは、内地出発の手紙を早川君から受け、千葉の佐倉迄駆けつけたが、前日既に戦地に出発した後だったとのことで、お母さんは死ぬまで「雅夫と会えず、雅夫が可哀想だった」と、悔やまれていた。と涙を浮べて話された。)

また、私にとっては初めての分隊長、落合信一班長(神奈川県)も、私達を救援してくれた翌日、名誉の戦死をされ、当時の分隊長山田忠雄軍曹(千葉県)も迫撃砲弾に直撃され戦死、第三分隊長山口富雄伍長(神奈川県)も重傷後病院で亡くなりました。また後輩の西村鎗三上等兵(千葉県)も病没してしまいました。このように、我が第一小隊は、五人中四人の下士官が戦傷死され、私の第四分隊でも三人が戦死病没されました。我が中隊の将校も六人中四人が戦死傷されたのです。

米軍が中国上海・広東方面上陸、満州のソ連の進攻、本土防衛と戦局はいよいよ最終段階を迎えたため、大陸打通の目的を達した支那派遣軍は、大本営命令で急

遽撤退を命ぜられたため、このような戦闘が続けられたのだと、戦後知ったわけです。

私も、軍隊での苦労は覚悟していましたし、訓練も行軍も作戦も、どんなに苦しくても耐え抜いてきたつもりです。しかし、一番の心を痛めたのは兄弟同様の戦友が多数戦没したことです。私たちも、よくぞ生きて還れたと今でも思っております。生も死も運だとはいうものの、隣の友が戦死傷する体験は一生忘れることができませんし、我々の使命第一は戦没者の慰霊だと、その灯を絶やさず、また我々の労苦を含め後世に伝えなければならぬと痛感しております。

近衛兵の意気地

南支翁英作戦と慰霊

富山県 藤森 良

―藤森さんは、近衛師団で南支の作戦に参加されたのですが、その中で印象に残ったことをお話下さい

い。

私は大正六年六月二十日生まれ、昭和十二年十二月一日、近衛歩兵第二連隊第三大隊に現役兵として入営しました。高岡市では五名が近衛に入ったのですが、当時は思想的にも厳しく、いろいろ調査があったのですが、部落の人たちの推薦があったからでしょう。

昭和十四年十一月二十一日、近衛混成旅団（桜田兵团）の動員が完結しました。近衛師団というと皇居、禁闕護衛が主任務とされていたのですが、支那事変で、十三年十月頃には南支の広東、中支の漢口を攻略するのに蔣政府は徹底抗戦をとまえ、事変はますます拡大してきました。

近衛師団においても「戦で錬えて来なければ宮城勤務は出来ないのだから、一年半をもって戦地へ派遣して下さい」と、陛下に言上したという。そのため混成旅団の動員下令となつて、富士の裾野での天覧演習を終わって戦地へ出発した。ですからわれわれ兵隊の意気も大変高くなっていました。

近衛混成旅団に参加した私の軍隊手帳の主要な事項